２０２４．３．３１．主日礼拝説教

聖書： マタイによる福音書28章1～10節

『わたしに会うことになる』

イースターおめでとうございます。

本日の箇所は次の四つに分けられます。①天使の出現(1-3)、②番兵の恐怖(4)、③天使の語りかけ(5-8)、④顕現(9-10)。まず①と③はマルコ16;1-8を資料としています。ただし②はマタイのオリジナルです。マタイがこの4節の「番兵の恐怖」を挿入したのは、5節の「怖れることはない」という天使から女性たちへの呼びかけで推察出来るように、女性たちも番兵と同様に怖れていたことを強調するためでした。天使は出現するし、イエスの遺体は無いという状況設定がマタイが選んだ復活記事の語り口なのです。

論理的に筋が通った説明で納得する場合とは逆に、事実に圧倒されて有無を言わさず納得させられて行くことがあります。そこではわたしたちの小賢しい判断は黙らされ、むきだしの弱さ･怖れ・不安を以てその事実と向き合わねばならないということが人生にはあるのです。そういう弱さ・怖れ・不安などという否定的な思いをするのは嫌ですから、何とか理由・筋道・解決をこじつけて元の肯定的な日常に戻りたいとは願うのですが、そうもいかないのが人生かも知れません。マタイが冒頭に描くこの不条理な弱さ・怖れ・不安とは、おそらく理由・筋道・解決

に依存して生きようとするわたしたちに、人生とは生かされていることへの気づきと感謝であることを分からせようとするいのちの思いやりなのではないでしょうか。

③では、マタイは天使の語りかけを中心におくのではなく、女性たちの応答を中心に据えています。マルコでは

天使(マルコでは「若者」)の語りかけに対して彼女たちは沈黙したままでした。マタイはこれを復活の証言にふさわしくないと考えたのでしょう。女性たちは「大いに喜び」、伝えられた伝言を果たすため「走っていった」と変更しています。

更に、マルコでは女性たちが墓に行くのは遺体に油を塗るためですが、マタイそれを削除して、復活の証拠として墓が空っぽであったことだけを強調しています。マタイの復活信仰とは顕現物語だけで語りきるのではなく、墓が空であったという物質的な証拠の提示なのです。それは当時のユダヤ教との論争の中で示さねばならなかった要素なのでしょう。

④でマタイはようやくイエスの顕現を描きます。恐れから喜びへ、そしてイエスと出会うという手続きが復活への導入であるとマタイは描くのです。

人は神を知ることは出来ないといわれます。それは、わたしたちの知識が及ばない程に神が大きいからではなく、神を知ろうとするわたしたちの側に理由・筋道・解決という誇りの姿勢があるからです。つまり、自分の生き方を変えずにそのままで知ろうとする誇りの姿勢です。しかし、神は人生の裏側から支えておられるわけですから、そのような姿勢では知ることは出来ないのです。姿勢を裏返さねばなりません。自分で作り上げた理由・筋道・解決ではなく、そんな誇りを奪われた弱さ・怖れ・不安の惨めさの中で、わたしたちは初めて神に支えられて神を知るのです。神を信じるという人が復活を告白するのではありません。神に生かされている人が復活を告白するのです。生かされている人は神を語るのではなく、生かされている自分を語るのです。復活とは神の問題でも人の問題でもありません。自分自身の問題なのです。